



Title	<書評>森淳『アフリカの陶工たち』中公新書 1992, 234P
Author(s)	井関, 和代
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 90-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52897
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

森 淳 『アフリカの陶工たち』 中公新書 1992, 234P

本書は副題に「伝統工芸を追って二十年」とあるように、アフリカの土器研究に長年たずさわってこられた森淳先生が、「民族学」の視点から土器製作やその社会的背景の記録を紀行文としてまとめられたものである。

評者は大阪芸術大学を卒業し、同大学に職を得て、森先生が長く所属された工芸学科において、染織学の研究を続けているが、それぞれの専攻である陶芸と染織とでは、工程におおいに異なりがある。そのため本書評には陶芸の専門家であれば、当然評価すべき、あるいは論及すべき点が欠けていることをはじめにおことわりしておきたい。

しかしながら、大学にあっては森先生に直接指導を受ける機会を得なかったものの、校庭で眼に触れるモリジュンさん（他に同姓の教授がいたので、皆がこのように呼びならわしている。以下、敬称は略させていただく）から、研究への励ましの声をかけていただくうちに、アフリカ研究にみちびかれ、その指導を受け、また本書に記される調査地の幾つかにも行くことができた。そこで本書評は著者の足跡をたどることを、観点として述べることにする。

*

内容は次のように、

- | | |
|-------------|---------------|
| 第1章 ウガンダにて | (pp. 3~51) |
| 第2章 カメルーンにて | (pp. 55~108) |
| 第3章 トーゴにて | (pp. 111~160) |
| 第4章 マリにて | (pp. 163~192) |
| 第5章 ガーナにて | (pp. 195~226) |
| エピローグ | (pp. 228~231) |

と著者が調査中に書き綴ったフィールドノートをベースに、紀行文として平易で読みやすいものにまとめられたものである。

まず一読すると、何よりも興味深いのは、これまで目を通した著者の研究論文（実製作作者による調査資料として海外でも高く評価されている）の背景が描かれていることである。これらのエピソードを通じて、著者のアフリカへの溢れる「おもい」を、あらためて知った。また、何気ない表現の中に、著者のアフリカ土器へのアプローチ法、調査作業のスタンスなどが窺え、教えられることの多さを痛感した。そして、アフリカの社会・文化に関心のある人々にとっては、幅広い情報が盛り込まれた入門書となるとも云える。

以下、その順に沿って、各章の内容を簡単なコメントを交えて紹介したい。

*

第1章は、1971年のアミン将軍の「クーデター」勃発時の緊張感のある描写から始まる。そして、著者がウガンダを離れるまでの、1968年からの3年間、東アフリカとの関わりが、その経緯に沿って記述される。海外技術協力事業団の要請から、ウガンダ工科大学へ赴任し、「アフリカの土器との出会い」「土器の魅力」「土器作りをみる」「弟子入り」と、大学での指導の合間をぬって続けられた調査・研究の日々や、その対象となる土器作りの村での様子が描かれる。この第1章でのウガンダ生活は、後に著者のライフワークとなる土器研究への姿勢が明示される。つまり製作者としての

「陶工たち」を内側の視点で理解し、研究者として外側から観察する、この両視点からアフリカの土器と対峙する、著者の基本的な姿勢を見いだすのである。

第2章・第3章は、アフリカの土器研究者の立場から、国立民族学博物館の共同研究に参加した著者が「学術調査員として」、1978年に西アフリカ・カメルーン国、1980年にトーゴ国において、土器を中心とする物質文化の調査を記録したものである。

「海外での学術調査には、その国の当該機関で発行する調査許可書が必要である。」

(p. 56) と、その入手から、調査地の設定、村入りの許可・挨拶、通訳の手配、調査対象者の選択、と調査にいたるまでの数々の準備行程は、どれ一つが欠けても、調査に入ってから後々に影響を及ぼすものである。評者も同じ調査地を経験し、淡々と綴られる内容のその大変さが他人事ではなく、教えられたことの大きさに深謝する次第である。

調査は土器作りから「焼成」「市の日」「土器売場での観察」、そして使用法、社会的背景、儀礼の観察、他部族との比較などと、著者の土器研究が単に、その製作記録にとどまらず、民族学の視点から人々を観察する。

第4章、第5章は著者が代表者となった大阪芸術大学からの学術調査の記録である。

この1983年のセネガル、マリ、ガーナ、カメルーンでの調査は、著者にとってこれまでの東・西アフリカの調査において得た資料と、新たに「私の計画は、まずダカールの国立博物館で西アフリカの民族誌に触れ、隣国のマリに入り、ニジェール川を遡り、古くからの交易地モプチ、ジェン

ネなどで、土器を通して、サハラ砂漠で隔てられた南北の文化と伝統工芸の交流を探れる可能性があるかどうか、そして最後はガーナで古い文化と伝統工芸に触れて、今後の本調査を立てたいと考えたのである。

(p. 164) と、土器を通じての文化体系を構築しようとするものである。これは、アフリカを広く知る著者ならではの構想であろう。

このような20年にわたる調査から、エピローグではさまざまな「アフリカの土器成形技法」を整理。最初せんべい状の底を作つておいて、その上に粘土紐を積み上げる。粘土塊の中央部を底まで抜いて、その上に粘土ひもを積み上げる。すでにできあがっている土器の底を丸みを利用した型作りの技法。凹型を使って、杵状の道具で粘土の塊を打ちながら、型作りする。湿らせた泥の滑性を利用して、回転するロクロ状の鉢の上で水挽きしながら成形。粘土の搔き上げによる、などと6種にまとめられている（以下、p. 226参照）。

これらは我が国では、手捻りと呼ばれる技法に属するが、ドーム状に底部分から粘土を搔き上げて成形する方法などは、従来知られていなかったユニークな工程で、著者の発見である。

＊

われわれ研究者は、専門の研究分野に学問的な関心を限定しがちである。

だが、著者は自らの専門である陶芸の枠を外し、他の工芸への、物質文化へとその研究対象を広げていく。この著者の在り方は本書のタイトルが答えとなるであろう。つまり「アフリカ土器」ではなく、「アフリカの陶芸たち」と名付けたことである。

著者の長いフィールドワークを支えたものは、未知の土器製作技法の調査目的だけでなく、アフリカの小さな村の人々との交流関係にあると思うのである。

「アフリカは中毒するよ」と、ウガンダ工科大学へ赴任した際の英国人教師の言葉を紹介する著者も、また多くのアフリカ研究者たちも、それぞれがアフリカに対する思い入れを持つ。そのため、マスコミや駐在員などが流す、窓越しのアフリカ情報に苛立ちを憶えることがある。そして機会があれば、それが自身の体験から、誤解されるアフリカの真の姿を紹介したいという願いがある。本書にも同様のおもいが鏤められている。

本書では1984年からの旱魃・飢餓の援助に対して、著者自身の経験から「草の生えた窓——良い教訓」とプエサ村での出来事が述べられる(pp. 36~43)。また、誰もが経験できるものでもない、1969年のクーデター事件では「考えてみると、クーデターの兆候は昨年からわずかだが、底流していたように思う。(p. 6)」とし、その事由の一つ一つをあげる。しかしながら、事件が起こるまでの約1カ月間、著者がどのような行動をとったかを明らかにしていない。冷静な判断力を持つ著者が、何故、不安にかられてBBC放送を聞くことになったのかと、略かれた部分に沈黙のメッセージが込められていると思うのである。

そして、「汽車で行ける楽園」の項(pp. 50~51)で、「ウガンダを去って以来二〇年の年が過ぎた。以来一度も訪れる機会がない。いまでも色々な人の姿や風景が記憶の中で去来する。私の友人の多くは消息不明のままである。……(中略) ……あの時

の教え子たちは、もう今では四〇歳を過ぎた頃だ。働き盛りの年頃である。楽園の再建に身を捧げている者もきっといるに違いない。」とある。今も著者の中に去来するウガンダへの想いが、陶工たちへの想いと、ウェーブのがかったBBC放送の声とが、いまだに重なっているのではないかと、評者は想像する。

さて、現地調査に出る研究者は、その調査中に見聞きした、さまざまな事を記録としてフィールドノートに書きとめる。著者も調査にでると、仏製の大判手帳を買い求めるが、この手帳はハードカバーに紙がグラフ状になり、持って歩くことを考慮した著者のこだわりである。この著者のフィールドノート18冊は本書のベースとなっているのだが、本書にも著されない学術的に貴重な未発表資料から、抱腹絶倒のイラスト入りメモまでが詰まっているのである。これを垣間見ている評者やアフリカ仲間は、いずれ論文に、そして「アフリカの酔いどれたち」「アフリカの楽師たち」などと、著者も共にくらした仲間たちの続編が出ることを期待する。

その意味で本書は、著者のアフリカ社会へのプロローグ編である。そして、後続するわれわれ研究者たちも、願わくば著者と同じアフリカへのロマンチシズムをもって、この地域に関わっていきたいと思うのである。

井関和代 大阪芸術大学